がん研究奨励賞
（林原・山田賞）

高田　尚良

略　　歴

昭和53年10月24日生
平成16年３月　岡山大学医学部医学科卒業
平成16年４月　岡山大学大学院医歯学総合研究科（腫瘍制御学専攻）入学
平成22年３月　岡山大学大学院医歯学総合研究科（腫瘍制御学専攻）修了
平成16年４月　財団法人永頼会松山市民病院総合診療科勤務
平成18年３月　財団法人永頼会松山市民病院総合診療科退職
（卒後臨床研修医により上記期間大学院休学）
平成19年４月　医療法人杏仁会　松尾内科病院勤務（社会人大学院生）
平成22年３月　医療法人杏仁会　松尾内科病院退職
平成22年４月　岡山大学大学院医歯学総合研究科（腫瘍制御学専攻）助教
現在に至る
学会その他における活動等
日本病理学会、日本癌学会、日本リンパ網内系学会、日本血液学会

研 究 論 文 内 容 要 旨

十二指腸濾胞性リンパ腫は節外性に発生する比較的稀な濾胞性リンパ腫で、十二指腸下行脚に好発し、非常にindolentな経過をたどるリンパ腫である。これまでに我々はそれらがAIDの発現、濾胞樹状細胞の発現を欠き、免疫グロブリンVH遺伝子の偏りから節性の濾胞性リンパ腫とは異なりMALTリンパ腫に性質が近いものがあり、そのために予後が良い可能性があるということを報告してきた。

また、消化管内には稀ではあるが、胃や大腸の濾胞性リンパ腫も発生する。我々は胃濾胞性リンパ腫８例、十二指腸濾胞性リンパ腫17例、大腸/直腸濾胞性リンパ腫５例を集積しそれらの臨床病理学的、分子病理学的な比較検討を行った。組織学的には十二指腸濾胞性リンパ腫は粘膜固有層に限局するものが多いのに対して、胃、大腸濾胞性リンパ腫は固有筋層～漿膜面にまで腫瘍が及ぶものが多かった。また、濾胞樹状細胞は胃、大腸濾胞性リンパ腫では節性濾胞性リンパ腫と同様のmeshworkを形成するのに対し、十二指腸では有意にその発現を欠き、特徴的なパターンを呈することが判明した。次に、B細胞のclass switch、somatic hypermutationに関わるとされるAID分子とBACH2分子の発現について検討したところ、胃、大腸濾胞性リンパ腫ではAID、BACH2いずれも発現するのに対し、十二指腸濾胞性リンパ腫ではAIDの発現を欠くにも関わらず、BACH2の発現が存在することが分かった。このことから十二指腸濾胞性リンパ腫におけるongoing mutationがBACH2依存性であることが示唆された。

また、memory B細胞のmarkerであるCD27の発現について検討したところ、節性濾胞性リンパ腫、胃、大腸濾胞性リンパ腫ではCD27の発現がほとんど見られなかったのに対し、十二指腸濾胞性リンパ腫では高率（17例中15例）にその発現がみられた。このことから十二指腸濾胞性リンパ腫の腫瘍細胞起源としてmemory B細胞由来であることが示唆された。

以上のことより、十二指腸濾胞性リンパ腫は節性濾胞性リンパ腫と様々な点で異なる点を有し、殊にMALTリンパ腫と同様のmemory B細胞由来であるという点からも非常にindolentな経過をたどるdistinctな腫瘍であることが示唆された。